

Seeing Things にみる新たな視点

薬 師 英 子*

A Renewed Point of View in *Seeing Things*

Eiko YAKUSHI*

Abstract

Seamus Heaney (1939-) published his ninth volume of poetry, *Seeing Things*, in 1991. In this book, he focused on his identity as an Irish, and a history, mythology and politics of Northern Ireland. He also dealt with the world of imagination and the dead, the landscape of his childhood, and his inner self. These themes had been the poet's constant preoccupation since his first publication of poetry. He wrote *Seeing Things* in order to re-view the things he had seen in the past. He also avowed a statement as a poet as he did in his first book of poems, *Death of a naturalist*, which was published in 1966. After overcoming from his parent death and reaching a turning point in his poetical career, he has come to review things in his life. In *Seeing Things*, his effort to recapture the past makes it possible to find his way of seeing things. He has new revelations about things in his ordinary life and discovers joy in writing poetry. This book reveals his renewed point of view and his changed attitude towards his poetry.

序論

1966年に出版された第一作目の詩集 *Death of a Naturalist* において、シェイマス・ヒーニー (1939-) は自らが詩人として生きる意志表明をする。農家の長男であった詩人にとって、その道を選ぶことはそれまで自然の中で育った自然児 (naturalist) である自らの死 (death) 意味する重大な決断であった。その後、彼は自国アイルランドの歴史や神話、幻想や死者の世界、精神的世界観、自然、時にアイルランドの宗教的政治情勢などを彼の作品の題材として取り上げてきた。第九作目の詩集 *Seeing Things* (1991) で、ヒーニーは再び彼がそれまで取り上げてき

た題材を描き、それまでと異なる視点で描写することで詩の世界の再構築を試みた。両親の詩や、詩人としての人生の転機点に立ったヒーニーは新たな世界観を見出し、再び詩人としての意思表示をする。本稿では、詩や現代社会を普遍的、かつ客観的な視点から見るヒーニーの姿勢に注目していきたい。

第一章ではヒーニーが詩人として抱いていた2つの葛藤に注目する。一つは、ヒーニーの第一作目の詩集 *Death of a Naturalist* に描かれる父との葛藤である。アイルランドの象徴ともいえるじゃがいも畑を代々受け継いできた農家の長男でありながら、詩人としての人生を選択し

*駒沢女子大学 非常勤講師

たヒーニーの作品にはその複雑な心境と父との関係があった。もう一つは、祖国と北アイルランドの宗教的政治問題である。彼は常に一人のカトリック教徒と公の立場にある一人の詩人として、その考えを明示することに苦悩してきた。一時は祖国アイルランドのカトリック教徒としての立場を明らかにしていたヒーニーが再び、新たな視点を見出す経緯を検証する。

第二章では、詩集のタイトルでもある *Seeing Things* 「ものごとを見る」という意味を検証していく。ここでは目で見たり、身体で感じることでできる肉体的、現実の世界と目で見つことのできない宗教や物事の真理などの精神的な世界、そして、死者との対話や幻想の世界など現実とは別の空想の世界の三つに着目していきたい。

I 死者との対話と和解

1991年、シェイマス・ヒーニーは両親の死を乗り越え、彼の九作目の詩集となる *Seeing Things* (1991) を出版した。この *Seeing Things* が出版される4年前には、1984年に亡くなった母 Margaret Kathleen、その2年後に亡くなった父 Patrick の死と直面した中で *The Haw Lantern* (1987) を出版している。この詩集において、母は “Clearance”、父は “The Stone Verdict” の作品の題材とされ、母の死はヒーニーとの間に和解があったことから、その死を受け入れている心情が示されている一方、父の

死についてはまだ受け入れることができない心境であることが示されている。これには、父の死後それほど時間が経っていなかったことも要因として考えられるが、農家の長男に生まれながら家業を継ぐという責務を果たさなかったヒーニーの罪悪感や、父との間に和解がなかったことが関係している。

ヒーニーの第一作目の詩集 *Death of a Naturalist* (1966) では、それまで『自然児』(Naturalist) であった自身の死 (Death) を通して、詩人として世界を見つめようとするヒーニーの決意が多くの作品を通して描かれている。その中でも、ヒーニーの代表作のひとつである “Digging” *Death of a Naturalist* (1966) では、代々継がれてきた農家の長男でありながら、詩人としての人生を選ぶ意志が明示されている一方で、脳裏に焼きつく畑で働く農夫としての父の姿が描写されることでヒーニーの葛藤が示されている¹。

ヒーニーは自身が詩人として活動し四半世紀、両親の死という新たな死、そして父との間に存在した葛藤と再び向き合うことで新たな視点を見出した。それは長い間罪悪感を抱いていた父 Patrick Heaney との和解であり、それまでヒーニーの作中で題材として取り上げられてきた生と死、現実と幻想、自然と人工的な世界を新たな側面から見つめなおす作業でもある。そこで、*Seeing Things* に描かれるヒーニーの父の存在に注目していきたい。

1 Seamus Heaney *Death of a Naturalist* (London : Faber and Faber, 1966) ‘Digging’ から
Between my finger and my thumb
The squat pen rests ; sung as a gun
Under my window, a clean rasping sound
When the spade sinks into gravelly ground :
My father, digging.
But I’ve no spade to follow men like them.
Between my finger and my thumb
The squat pen rests.
I’ll dig with it.

1-1：父の存在と葛藤

Seeing Things の一つ目の作品である“Golden Bough”は、トロイの王子であるアエネイアスが預言者シュビレー（Sibyl）に死者の世界へいる父との再会を嘆願する場面が描かれている。預言者シュビレーはアエネイアスが金の枝を手に入れてくることを条件に、彼をヘイデース（Hades）の支配する冥界へ案内することを約束する。亡き父に合うために死者の世界へと旅立つ様子は、同詩集の“Seeing Things”の第一部に描かれる詩人と船頭の姿を反映している。同時にこれらの詩はヒーニーの第一作目の詩集 *Death of a Naturalist* に収録されている“Follower”とも深く関係している。

“The Golden Bough”ではアエネイアスは矢が飛び交い燃えさかる城下の中、父アンキセイウスを背に負う姿が描かれている。ここでは息子が父を危険から救い出す光景が描かれている一方、ヒーニーの初期の作品である“Follower”では、まだ幼い少年である詩人が父の背に負われている姿が描写されている。その父の背は舟の帆であるかのように描かれ、死者の世界に舟で渡ろうとするアエネイアスとの関連性が伺える。二つの詩から、詩人と父との関係が暗示されているのと同時に、後に発表された“The Golden Bough”では父と子の立場が逆転しているのが明らかである。

1-2：父との和解

第一作目の詩集でヒーニーは自然を探求する少年の姿を描き、自身を自然児であると描写している。そのうえで、同詩集の“Death of a Naturalist”では、自然児の死を持って詩人としてのヒーニーが生み出されることを示唆して

いる。また同詩集の代表作である“Digging”では父の農作業と自らの詩作活動を対比し、父の存在に威厳や尊敬の念を感じる一方で、一家の長男として家業を継がなかった罪悪感や大きな葛藤も描かれている。同様に“Follower”においても、父は力強い絶対的な存在として描かれる中、作品の終盤では、父は詩人を苦しめる「纏わりつく者」であると断言する。

これらの初期の作品に対して、*Seeing Things* に収録されている同タイトルの3部目には詩人の幼少期と空想の世界が昔話を語る構想で描かれ、ここで初めて詩人は父との対面を果たす。父の帰りを家で待っていた少年である詩人は、農作業の帰り道馬車の事故で川に引きこまれそうになり、川の水に濡れまるで亡霊のようになって帰宅した父の姿を見る。この作品での父親はそれまでの力強く威厳のある姿とは対照的に描かれ、作品の終盤も「末永く幸せに暮らしました」というおとぎ話調の詩人の願望や希望的な心情を伺える形になっている。また、同詩集に収録されている“I. I. 87,”では父に対しての心情の変化が明確に示されている²。それまで詩人にとって苦悩と葛藤の対象であった父が危機を乗り越えるために支えとして描写されている。さらに、詩の中に書かれている‘father’s stick’は、同詩集の“Golden Bough”で死者の世界に入るために必要であった「金の枝」であることが暗示されている。

II “Seeing Things”

ヒーニーの詩集は、そのタイトルにも明示されているように、多くがそれぞれ一つの物事を題材としている。初期の詩集では、牧歌的な田園風景や日常生活での発見が描かれた。その後、

2 Dangerous pavements.
But I face the ice this year
With my father’s stick.

北アイルランドとアイルランドの紛争が激化すると、アイルランドの過酷な歴史や現代アイルランドの抱える歴史的・宗教的闇を描いた。アイルランド紛争最中の故郷を離れたヒーニーは自らのアイルランド人としてのアイデンティティを模索し、政治・宗教的な立場を明示することで故郷の分裂と向き合い、現実を受け入れようとした。その後、ヒーニーの作品は政治・宗教的な題材から離れ、古典作品の翻訳やアイルランド伝承に傾向する。歴史や伝承を読み解き、ダンテやヴェルギリウスの作品に導かれることによって、ヒーニーは新たな視点を見出すことになる。それまで現実的・主観的な視点から作品を描いていたヒーニーは、新たな詩の世界を再構築するために多面的かつ普遍的な視点を探求する。*Seeing Things* でヒーニーは3つの物の見方を提示している。ここでは目で見たり、身体で感じることでできる肉体的、現実の世界と目で見つことのできない宗教や物事の真理などの精神的世界、そして、死者との対話や幻想の世界など現実とは別の空想の世界の三つに着目していきたい。

3-1 目で見えるもの

Seeing Things は2部構成になっており、第一部の詩の多くは日常生活での視覚的な世界的重要性を提示している。Douglas Dunn が述べているように、ヒーニーは彼の日々の生活を再評価しようと試みる³。“The Ash Plant,” “The Pitchfork,” “A Basket of Chestnuts,” “The Settled Bed,” “The Schoolbag,” “The Cot,” “The Skylight” and “Wheels within Wheel”

などがそれらを示す詩として挙げられる。

また、‘Seeing Things’の一部においてのヒーニーの巡礼の旅は、肉体的な面で外の世界に出て、未開拓の世界を見聞する旅であるのと同時に、宗教的な要素を持った精神的な面で内面的の世界を探求する旅でもある⁴。詩の中では五感を通して、湖を渡る船や風景、人々の物質的な要素と、目にはうかがうことができない内面的な心情も同時に詳細に描写されている。

詩の前半部、「太陽の光」という視覚、「泥炭から立ち昇る煙」という嗅覚、「かもめ、船の鎖、ディーゼル」という聴覚をはじめとし、乗客が「乗り込むたびに、浮き沈みをする船」といった物質的・肉体的な感覚を強調している。同時に「舟のエンジンがかかり、船頭が舵柄に手を伸ばし船のバランスを取るために揺り動かした時、舟がふわっと浮き上がり、その全体が持ち上がったことに動揺した」とした表現から、アンバランスな船に乗る乗客と、未開の地に立ち入ろうする不安を示唆されている。

2-2：目に見えないもの

‘Seeing Things’の一部では舟や景色、人々の様子など外面的・物質的なものが多く取り上げられていたのに対し、二部では目に見ることができない宗教や信仰などが題材とされている⁵。

ヒーニーは目に見ることができない神や信仰を、美や芸術と言った目にみえるものから表現し、そこに物事の真相や真理が隠されていることを暗示している。また、宗教的な題材に明確に個人的な立場を記さないことも、初期の作品と異なる点である。作品のなかで、彫刻に描か

3 Douglas Dunn, “Quotidian Miracle : *Seeing Things*” *The Art of Seamus Heaney*, Tony Curis ed. 4th edition. (Ireland : Wolfhound Press, 2001) 207

4 ヒーニーは旅の重要性について「現代ギリシアのカヴァフィスに「イタケー」というすばらしい詩がありますが、その詩のいわんとすることはおおむね、旅において人（詩の語り手＝詩人）は行き先こそ重要だと考えるけれども、（旅のあとで実は）重要なのは旅そのものだということだ」と述べている。

れる川の線を詩の line とし、その line を読むことの難しさを、彫刻の石板の hard と比喻している。さらに、人々に訴えても伝えきれない言葉の力の弱さや、逆に詩を書き言葉にすることで社会的、政治的なことに大きく影響を及ぼしてしまうという複雑さも示している。しかし、ヒーニーはいかに詩人が詩を書くにあたって困難であろうとも、それに妥協することはないことを言い含めている⁶。

作品の中でヒーニーは聖堂の彫刻に描かれた「その他（魚以外）には、何もない」と述べている。しかし、その直後に確実に目で見ることができ石が在るが、その石が本当に意味することは目で見えないところにあるとしている。つまり、壮大な彫刻そのものではなく、その背景にある神や宗教といった目に見えないものの重要性を示唆している。また、陽炎に立ち昇る幻想的な光景を「エジプトのジグザグな象形文字のよう」であるとし、具体的な物質世界ではなく象徴的なものを強調している。

宗教という普遍的なものでありながら、強く個人的なものであるもの題材とし、ヒーニーの詩そのものが同じように公（パブリック）なものでありながら、私（プライベート）なもので

あるとう二面性を暗示している。

結論

Seeing Things には *Death of a Naturalist* の死と自然、*Wintering Out* のアイルランドの史跡や歴史、*North, Field Work* の政治的要素、*Sweeney Astray*、*Station Island* での死者の世界と彼らとの対話など、それまでのヒーニーの詩の要として描かれてきた題材が取り上げられている。生と死や、現実と幻想、目や体で感じることのできる物質的・肉体的なものを目に見ることはできない内面的・精神的な世界など、対照的なものを新たな側面から見つめなおし、それらを普遍的、客観的視点で描くことでヒーニーは新たな詩の世界を見出そうとした。詩人の新たな視点と観点を持って描かれたこの詩集は、ヒーニーに大きな転機をもたらした ‘a book of change’ であると考えられる。

参考文献

- Allen, Michael, ed. Seamus Heaney. New York : St. Martin's, 1997.
- Andrews, Elmer, ed. Seamus Heaney : A Collection of Critical Essays. New York : St.

-
- 5 光輝 涙を流すことのないそのラテン語は、
膝下まで足を川に浸け、洗礼者ヨハネによって
頭から水を注がれているイエス・キリストの洗礼の姿が
彫られた石にぴったりの言葉だ。
その光景は、
大聖堂の証明に太陽に照らし出されている。
流れの激しさや弱さ、曲線がその川の流れを表している。
その流れの中を、小さく風変わりな魚たちが泳いでいく。
その他には、何もない。
確実に見えるものがあるなかに、
その石の見えないところに生命がある。
水草や流れのかき回された砂粒たちが
影なき影のような川にいそいそと流されていく。
昼下がりに 石段に陽炎が揺れ
僕たちが立ちすくすその大気は
人生を表すジグザグな象形文字のように揺れていた。
- 6 ノーベル賞受賞スピーチにおいて、「詩は詩としてあるのであって、社会的、道徳的、政治的、歴史的事実の強制的な圧力にどれほど詩人が妥協するとしても、究極に詩人は詩が要求するもの、詩が約束するものに忠実でなくてはならない。」と述べている。

- Martin's, 1992.
- Bloom, Harold, ed. *Seamus Heaney : Comprehensive Research and Study Guide*. New York : Chelsea House, 2003.
- Corcoran, Neil. *The Poetry of Seamus Heaney : A Critical Study*. London : Faber, 1998.
- Curtis, Tony, ed. *The Art of Seamus Heaney*. 4th edition. Ireland : Wolfhound Press, 2001.
- Foster, John Wilson. *The Achievement of Seamus Heaney*. Dublin : Lilliput, 1995
- Fumagalli, Maria Cristina. *The Flight of the Vernacular : Seamus Heaney, Derek Walcott and the Impress of Dante*. New York : NY, 2001.
- Garratt, Robert F. *Critical Essays on Seamus Heaney*. New York : G.K. Hall and Co. An Imprint of Simon and Schuster Macmillan, 1995.
- Hart, Henry. H. *Seamus Heaney : Poetry of Contrary Progressions*. New York : Syracuse University Press, 1992.
- Ingelbien, Raphael. *Misreading England : Poetry and Nationhood since the Second World War*. New York : New York Press, 2002.
- Malloy, Catherine, Carey, Phyllis, ed. *Seamus Heaney : The Shaping Sprit*. USA : University of Delaware Press, 1996.
- MaCathy, Shaun. *A Guide to Poems of Seamus Heaney*. Hodder and Stoughton, 1999.
- MuGuinness, Arthur E. *Seamus Heaney : Poet and Critic*. Peter Lang Publishing, 1994.
- Molino, Michael R. *Questioning Tradition, Language and Myth : The Poetry of Seamus Heaney*. USA : Catholic University of America Press, 1994.
- Murphy, Andrew. *Seamus Heaney*. 2nd ed. Devon : Northcote House, 2000.
- Parker, Michael. *Seamus Heaney : The Making of Poet*. London : Macmillan, 1993.
- Tamplin, Ronald. *Seamus Heaney*. Open University Press, 1987.
- Thomas, Harry, ed. *Talking With Poets*. New York : NY, 2004.
- Wade, Stephen. *More on the Word-Hoard : The Work of Seamus Heaney*. Nottingham : Paupers, 1993.
- Vendler, Helen. *Seamus Heaney*. USA : Harvard University Press, 1988.
- Heaney, Seamus. *Death of a Naturalist*. London : Faber, 1966.
- . *Door into the Dark*. London : Faber, 1969.
- . *Wintering Out*. London : Faber, 1972
- . *North*. London : Faber, 1975.
- . *Field Work*. London : Faber, 1979.
- . *Station Island*. London : Faber, 1984.
- . *The Haw Lantern*. London : Faber, 1987.
- . *Seeing Things*. London : Faber, 1991.
- . *The Government of the Tongue*. London : Faber, 1988.
- . *Preoccupations*. London : Faber, 1980.
- . *Finders Keeper*. London : Faber, 2002.